



「特殊講義(アカデミック・リテラシー)【日本語の技法】」の開講について

棕本 洋 教育開発推進機構 教授・接続教育センター長

→ 文章が書けない大学生

近年、大学教員の間で、「最近、文章が書けない学生が多くなった」とこぼされる方が多くいます。学生達のために弁護しておきたいのですが、それは、学生が不勉強のためだけではなく、日本の国語教育に構造的な欠陥があるせいでもあります。戦後7年間、GHQの指導で、中学校の国語は、「言語」と「文学」の二つの科目に分かれた時期がありました。しかし、1952年サンフランシスコ講和条約の発効後は、「言語」は廃止され、日本の言語教育は大きく後退しました。その後の指導要領の改訂においても変更されことなく、日本では、小、中、高校において、作文指導はあっても、言語教育はされていません。

それでも、私たちの時代は読書によって、自分の文体らしきものを何

とか作り上げていました。また、卒論等で、教授や先輩から学ぶことができました。しかし、大学の大量化と呼ばれる今日、学生たちの読書量が減少し、ライティングの基礎となる『読む』ことが少なくなっています。

→ 初年次における教育上の配慮

そうしたユニバーサル化した大学の実態を背景に、中央教育審議会は、大学生という「人生の新たな段階、未知の世界への『移行』を支援する取組として」、初年次教育の導入を要請しました。（「学士課程教育の構築に向けて」(答申),2008年12月）ここで、初年次教育とは、「高等学校や他大学からの円滑な移行を図り、学習及び人格的な成長に向け、大学での学問的・社会的な諸経験を成功させるべく、主に新生を対象に総合的につくられた教

CONTENTS

- P1 特殊講義（アカデミック・リテラシー）【日本語の技法】の開講について
- P3 立命館大学における関西地区 FD ワークショップの報告
第三者の意見紹介 考える力と書く力の開発に焦点を当てた FD
- P4 センター報告
2011 年度 教員研修プロジェクトまとめ
- P5 プレ・エントランス立命館デー開催
2011 年度 教学実践フォーラム開催報告

- P6 シリーズ初年次教育最前線
文学部「リテラシー入門」の「これまで」と「これから」
ーライティング教育の新たな展開に向けて
- P7 シリーズ質保証
映像学部における重点行動計画策定ワークショップの取り組み
- P8 ピアラーニングだより
ラーニング・コモンズ『ぴあら』
FD Glossary

育プログラム」として説明されています。(文部科学省HP)

ちなみに、文部科学省の調査では、新入生向けプログラムである初年次教育を実施する大学は増加し、2008年の実施大学数595大学(82%)から2009年には617大学(84%)と増加し、例えば「レポート・論文の書き方等文章作法関連」では、533大学(初年次教育を行う大学の86%が実施)が実施しています。(文部科学省『大学における教育内容等の改革状況について(概要)』2011.8)

本学においても、学友会は、「新入生は高校の課程とは何かものが違う大学のシステムに戸惑いがちであり、大学における学びへと転換する仕組みの内実化が必要である」と答申と同様の主張をしています(2011年度全学協議会確認文書)。

本学では、すでに初年次教育として、様々な取り組みを行っています。本講義の前身である「特殊講義・学びのとびら・入門」(定員100名)もその一つに数えることができます。「学びのとびら・入門」は、複数学部から選出されたメンバーにより構成されたワーキンググループでの議論を経て、2010年度から2年間の試行を行い、受講生たちに高い評価を受けています。そこで、再度ワーキンググループを結成し、講義の継続について、また継続する場合はその改善点など検討し、複数学部からの要請もあり、来年度より受講対象クラス数を拡大して開講することにしました。(2011.9.26教学対策会議承認)

→ 授業の概要

本授業では大学で学ぶために必要な「文章を読み解く力」や「思考力」「論証能力」「発想力」、そして基礎的な「アカデミック・ライティング力」の育成を目的としています。

このような、目標を達成させるために、到達目標を以下のように設定しました。

①基本的な議論(論証)とパラグラフ・ライティングの知識について理解し、それを用いて議論(論証)とパラグラフの構造を論理的に把握することができる。(知識・理解)

②基本的な日本語と論文のルールについて理解し、論文の構造やアウトラインを論理的に把握することができる。(知識・理解)

③議論(論証)とパラグラフ・ライティングについての知識を活用して、物事を論理的に説明することができる。(思考・判断)

④学問的・研究的な興味関心を持ち、疑問を抱き、「問い」を立て、自らその「問い」を調べ、意欲的に考えようとする。(関心、意欲)

⑤自らテーマを見つけ、トゥールミンの議論モデルを踏まえて、論文のアウトラインを設計し、1600字の論文に書くことができる。(技能・表現)

そのために、授業は、講義と演習により、「論文へのアプローチ」(3回)、トゥールミンの議論モデルを紹介する「議論と論証」(5回)、「パラグラフ・ライティング」(3回)、「アウトラインとその展開」(4回)で構成する。

また、こうした基礎的な文章作成の技術の指導は、講義を通して複数回のレポート課題を課し、提出された課題は添削して返却されます。受講生は添削された文章を見直し、更に完成文章を作成する形でライティングの基礎力を養います。

→ 開講学部と今後の期待

2012年度の受講対象学部は、衣笠の映像学部(1クラス)、BKCの経済学部(3クラス)、経営学部(3クラス)、理工学部+情報理工学部(合同1クラス)の計8クラスとし、受講規模は定員100名/クラスで開講します。

また、担当教員は、教育開発推進機構所属教員および非常勤講師が受け持ち、同時に、授業打ち合わせを綿密に行うとともに科目設計も行います。その際、将来、各学部が学部独自の「アカデミック・ライティング」の授業を開講する時に、参考になるモジュールを目指して作成します。

さらに、核となる添削指導を支えるTAを事前研修及び添削指導打ち合わせによって、添削技術の向上をはかるとともに、TAが修士論文や博士論文を書くためのトレーニングとなることを期待しています。事実、「学びのとびら・入門」のTAの院生たちからは、自らの論文作成の時に添削指導の経験が役立ったという声が寄せられています。8クラスの開講を成功させるためには、多くの院生のTAを必要としており、開講学部はもとより、学部外の研究科の院生に応募して頂くことを期待しています。

前掲の中教審答申では、「今後、我が国においても、初年次教育は、学部・学科の縦割りの壁を越えて、充実したプログラムを体系的に提供していくことが課題となる」と述べています。今回、開講したこの授業は、その要請に十分に応えうるものとしたと考えています。そのために、今後3年間の実践を行いつつ、開講学部との連携、既に学部独自に「アカデミック・ライティング」を開講している学部との交流などを図り、この授業を育てていきたいと思っています。

2012年度は 「ピアで学ぶ大学生の日本語表現-プロセス重視のレポート作成」を 本授業のテキストとして採用します

相手に伝わるレポートの書き方・発表の仕方をも身につけるための実践的表現活動のテキストです。「ピア(peer)」とは、英語で「仲間」を意味し、レポートを作成する一連の作業を、学習する者同士で読み合い、話し合いながら進めていきます。単なる文章の書き方ではなく、総合的に日本語表現やスタディスキルの力を養うのに最適なテキストとなっています。



大島弥生ほか
『ピアで学ぶ大学生の日本語表現-プロセス重視のレポート作成』
(ひつじ書房, 2005)

立命館大学における関西地区FDワークショップの報告

第三者の
意見紹介

考える力と書く力の開発に焦点を当てたFD

小田中 章浩 大阪市立大学大学院文学研究科



2011年12月17日に立命館大学(以学館)で開催された第8回関西地区FD連絡協議会のワークショップ「思考し表現する学生を育てるIV-ライティング指導の方法-」では、学生の思考力と、それに基づいた文章力をいかに発展させるかについて、さまざまな取り組みが報告されました。たとえば私が参加したグループワークでは阪南大学の花川典子教授が、大学院生のチームと開発したコピー検索システムについて紹介しました。これは単に学生レポートのコピー & ペーストをシステムティックに検出するための仕組みなのではなく、そこから翻ってコピーを誘発しやすい課題とはどのようなものかを参加者に考えさせるという点で、大変興味深いものでした。

また薄井道正氏(立命館大学守山中学校・高等学校教諭、立命館大学非常勤講師)の事例報告「立命館大学における初年

次日本語リテラシー科目の取組」では、事実をどう把握し、それを文章化するかという観点から、氏が行っている授業の実践例が紹介されました。授業では9.11をめぐる報道や、3.11の震災直後に出回ったチェーンメール、あるいは小学校の教科書など、さまざまな事例を取り上げ、どのような根拠に基づいて推論を行えば、事実(と思われるもの)に対して批判的な思考を行うことができるかが説明されます。次にそれに基づいて、学生に作文の課題が示されます。ここで重要なのは、この授業が100人規模の大人数授業でありながら、TAを活用することによって、繰り返して学生の作文が添削されていることです。この種の授業が日本の大学において広くシステムとして定着すれば、大きな成果を上げることができると思います。

関西地区FD連絡協議会(2008年4月設立、会員校数:現在140校)のFD連携企画WGは立命館大学(責任校)、関西大学、神戸常磐大学、京都大学が実施組織となり、共通テーマとして「思考し表現する学生を育てる」を取り上げ、毎年イベントを開催しています。第一回立命館大学、第二回関西大学、第三回京都大学、第四回は再び立命館大学衣笠キャンパス(2011年12月)で行われました。

今回のWSのプログラムは次の通りです。

講演 モジュールに基づいたレポート、小論文の作成方法について

小田中章浩(大阪市立大学文学研究科教授)

事例紹介 立命館大学における初年次日本語リテラシー科目の取組み

薄井道正(立命館守山中・高教諭/立命館大学非常勤講師)

グループワーク

- 論文指導「十字モデルで協同的に論文を考える」
牧野由香里(関西大学総合情報学部教授)
- 作文法「科学的作文法入門」
倉茂好匡(滋賀県立大学環境科学部教授)
- コピー対策「阪南大学コピー検索システム」
花川典子(阪南大学経営情報学部教授)
- 総合討論

小田中章浩氏の講演内容は文章が論理的であるためには文章の設計図(アウトライン)が重要であり、そのプロセスを学ばせることこそ重要であるというものでした。

また、目的を明確にするためには対立軸が重要であり、そのためには接続詞の活用が大切であるとのことでした。

薄井道正氏の事例紹介の対象科目は上記の通りであり、授業の到達目標は「読む」、「書く」、「考える」ことを理解し、その技法・スキルを身につける・スキルを駆使し、自らの主張を効果的に表現できる・自らテーマを見つけ、意欲的に読み、書き、考えることができると紹介されました。注目を引いたのは、良い文章を書く必要がある動機付けとして、絵を文章で表現し、その文章からどのような絵が描かれたかの事例を示し、読む人の立場で書くことの必要性を示したこと、きめ細かい指導を行うためにはTAの活用が今後欠かすことができない中、TAの指導を具体的に示した点でした。

詳しくはhttp://www.kansai-fd.org/activities/wg/fdwg/report_20111217.html をご参照ください。



薄井道正氏 事例紹介の様子

2011年度 教員研修プロジェクトまとめ

沖 裕貴 教育開発推進機構 教授



2011年9月に行われた「授業設計論演習Ⅰ」の様子

本学では、2008年度『教育の質を保证する教員職能開発と大学連携』が文部科学省教育GPに採択されたのを契機に、全国の有力私立24大学が集う大学間ネットワーク「全国私立大学FD連携フォーラム(JPFF)」を通して「実践的FDプログラム」を開発し、2009年度から本学の新任教員(本学に新規採用された専任歴3年未満の教員)を対象に研修を実施してきました。

2010年度末には所定の研修を終えた2009年度生11名に修了証が授与され、2011年度には2009年度生2名と任意受講教員1名を含め、新たに16名の修了者を送り出すこととなりました。

2011年度の教員研修プロジェクト(ポストGPプロジェクト)は、①JPFFにおける新規加盟校の拡大と、②新任教員研修の修了率の向上ならびに学内教職員の研修講座への参加促進、そして③PFPP(Preparing Future Faculty Program)の開発の3点に活動方針を定め事業を展開してきました。

①に関しては、到達度の評価基準を評価4(=5大学以上)、評価3(=3~4大学)、評価2(=1~2大学)、評価1(=0大学)と置き、評価3の獲得に向けて鋭意努力してきましたが、2011年度末の段階で龍谷大学だけの新規加入にとどまり、中部大学が2012年度の総会で加盟承認を受ける予定はあるものの、評価2の結果にとどまりました。

②に関しては、評価指標を単年度修了率と置き、評価基準を評価4(=50%以上)、評価3(=40%~49%)、評価2(=30%~39%)、評価1(=29%以下)と定め、評価2を目指して活動を推進してきましたが、2010年度生の修了率は13名、28.8%にとどまり、到達目標の達成はかきませんでしたが、2009年度生のうち2名(任意受講教員を除く)が新たに受講を修了されたため、2009年度生の修了率は累計13名、33.3%に増え、目標の評価2を達成しました。2010年度生においては、当初履修率も高く、大幅な修了率の向上が見込まれましたが、修了可能な受講者の中から学外研究や、産前休暇・産後休暇に入られる方が続出し、残念ながら2011年度末の修了には至りませんでした。この点に関しては復帰後、2012年度の修了を目指して一層の支援体制を整備していきたいと考えます。また、②の方針に挙げていた学内教職員の研修講座への参加促進に関しては、今年度初めて1名の教員(准教授)が100%修了を達成し、学長表彰を受けられることになりました。100%修了とは、新任教員対象FDプログラムで履修を求められている15本のオンデマンド講義(VOD)視聴とレポート提出、10本のワークショップ受講とティーチング・ポートフォリオの提出すべてを完了し、修了式においてその功績と努力を讃えて学長表彰が行われる対象を指しています。2010年度においては3名が対象でしたが、今年度は6名に増え、私たちの大きな喜びとなっています。なお、2011年度、本

プログラムのワークショップに任意で参加して下さった教職員は学内から延べ19名(2010年度は16名)、学外から延べ26名(2010年度18名)に上り、徐々にプログラムの認知度が上がってきたと言えるでしょう。

最後に③に関しては、2011年7月27日にキャンパスプラザ京都の会場を借り、7名の後期博士課程在籍者と1名の修士課程修了者を対象に、大学院課の協力のもと「大学教員準備セミナー『大学で教えること』」を開催しました。セミナーは、事前に視聴とレポート提出を課していた4本のVODを含めて8コマ分相当のプログラムからなり、当日は米山裕教学部副部長の挨拶で始まり、江原武一教授の「大学教員とは～大学教員のあり方について～」の講義、沖の「授業の設計～到達目標の設定と『強制連結法』による授業設計～」の講義とワークショップ、授業設計の個人ワークを挟んで、最後に林徳治教授の「模擬授業と相互評価～マイクロティーチング～」と丸一日濃密な内容で行われました。しかし、受講生からは「いかに研究以外の場でこうして外へ踏み出すことが大切か、自分は今回のセミナーでようやく気付いたので、これから他の院生にもすすめてみようと思う。これほど先生方と親密にお話できると思っていなかったの、貴重なご意見をいただけて本当にうれしかった。本学に進学してよかったと、心から思う。」と嬉しい感想が寄せられました。

2011年度の新任教員FDプログラムの参加者は、学内外、ランチタイムFDも含めて延べ437名(2010年度 455名)に上りました。2010年度生の10回のワークショップに参加された方々の満足度も、各回にとったアンケートを集計したところ5段階中4.3(2009年度生は4.2)と前年度を上回り、受講生はもとより多くの方々のご協力のもと、どの回も充実した研修が行われたことがうかがわれます。2012年度からは、受講者の要望と課題に応えやすいよう選択履修の講座を増やすことを検討しています。今後もますます多くの方々を受講していただき、役立ったと言ってもらえるよう教育開発推進機構の教職員一同、努力してまいります。



2011年7月に行われた「大学教員準備セミナー」の様子

プレ・エントランス 立命館デー 開催



2011年度のプレ・エントランス立命館デー（以下、略称「プレエン」）が、2011年12月17日（土）に衣笠キャンパスとびわこ・くさつキャンパスで実施されました。これは、年内に合格が発表される特別入試の合格者を対象に、学習を含めた入学前準備のガイダンスを行うイベントです。当日は厳しい冷え込みに見舞われつつも、2012年度に入学予定の合格者とその保護者、あわせて約2,400名の方々に、日本各地から足を運んでいただきました。

春からの学び舎となるキャンパスで、合格者には、①教職員や先輩を交えた学部ガイダンスと②入学前学習について具体的に触れる全体ガイダンスという2つのガイダンスに参加していただきました。これは、入学後のイメージを膨らませるとともに、入学前準備・学習への意欲を高めてもらおうという狙いによるものです。また、これらと並行して、保護者を対象としたガイダンスや講演会、キャンパス・ツアー等の企画が展開されました。

本年度の主な変更点として、イベント運営の管轄が入学セ

ンターから教学部に移管された事が挙げられます。ここでは、入学前の教学課題（前提となる基礎学力の定着）と、入学後の教学課題（高校の学びから大学の学びへの円滑な接続）との関連をより強化することが目指されています。今年度における具体的な施策の詳細は「立命館大学の入学前教育の到達点について」（ITL NEWS 2011, No. 20）をご参照ください。

各企画における参加者の反応から、入学後の学びや学生生活、そしてキャリアパスに関する情報を、教員や学生から直接に得られる機会が重要であることを思い知らされる場面が多くありました。それだけに一層、大学を挙げての企画である「プレエン」を教学部門として受け止め、活かす方法を改善していく必要を感じています。2012年2月初旬の時点で、現在、入学前教育の真つ只中にありますが、随時に集まりつつあるデータや、運営における反省を元に、入学前準備・学習支援体制のより良い形を作っていきたいと考えています。

2011年度 教学実践フォーラム 開催報告

本フォーラムは本学におけるFD推進活動の一つの柱として2002年度から、教養教育、教材開発、授業アンケートなど様々なテーマについて開催してきました。2011年度は①四年に一度の全学協の年であることから学生参加、②著しい中等・高等教育情勢変化の把握、③従来の学内向けから学内外に広く公開、を方針としました。開催されました3回のテーマは以下の通りです。

第1回：高校生の学びの実態と初年次教育

（2011年10月28日開催、35名参加）

第2回：高校現場はどう変わるか

—大阪・京都の高校教育を事例に考える—

（2011年12月7日開催、39名参加）

第3回：大学における根拠に基づく教学改善とIR

（2012年1月27日開催、94名参加）

1・2回は入試や具体的な現場のデータに基づく実践フォーラムということで学内限定として開催しましたが、3回目は国際シンポジウムと称して外国からの演者をお招きするとともに学外にも広く広報いたしました。1・2回では主に高校現場の実情を知る良い機会となりました。3回目は学外からの多くの参加者を得、活発な議論が展開されました。

以上のように、本年度は上記3つの方針の内②、③は達成することができましたが①の学生参加は第3回に2名の学生の参加を得たのみで、目的を十分には達成することができませんでした。来年度も方針を精査し、多くの方に参加頂けるテーマでフォーラムを開催する予定です。



「大学における根拠に基づく教学改善とIR」より、パネルディスカッションの様子



「高校現場はどう変わるか」より、衣笠キャンパスでの講演の様子

初年次教育 最前線

文学部「リテラシー入門」の「これまで」と「これから」ライティング教育の新たな展開に向けて

清田 淳子 文学部 教授

文学部は、これまで「研究入門」と「リテラシー入門」という二つの科目によって初年次教育の充実に取り組んできました。「研究入門」(通年)を各専攻の専門教育への導入として位置づける一方、「リテラシー入門」(前期のみ)は「文章作成」「情報処理」「キャリア教育」の3つの目的に特化した文学部共通の教育を行ってきました。

この基本的方針の延長線上において、文学部の改革(学域・専攻制の導入とそれに伴うカリキュラム再編)の中で初年次教育の抜本的な拡充を図ることを目的として、「リテラシー入門」の内容や進め方についても大胆にして綿密な検討を加えました。その結果、2012年度からの「リテラシー入門」は、「スチューデントスキル」「ライティングスキル」「インフォメーションスキル」「キャリアスキル」という4つのスキルの涵養をめざし、それぞれ充実した内容を提供するとともに、前期・後期の連続した科目として展開することになりました。

では、どのような点が大きく変わったのか、表1をもとに説明します。

2012年度以降は、これまでになかった「スチューデントスキル」の観点を立て、学習習慣や自己管理について学ぶ機会を設けました。「インフォメーションスキル」の授業では、図書館の使い方、Webページの作成、インターネットの活用とマナーについて新しく取り上げます。「キャリアスキル」では、キャリア形成に関わる講義を聞き比べるとともに、国際平和ミュージアムの見学と討議、2回生からの専攻選択に向けた説明会を実施します。そして、「ライティングスキル」については、アカデミック・ライティングの基礎を前期で学び、後期では各々の研究領域に特化したライティング技能を身につけるべく、「学域別ライティング」の授業を行います。

次に、2012年度からの「リテラシー入門」で四本柱の一つに位置づけられているライティング教育について、特に文学部共通で実施する前期の取り組みについて述べます。前期のライティングの授業は、目標や方針は2011年度までのものを引き継ぎます。具体的には、「大学で求められるレポート作成に必要な、基礎的なスキルと態度を身につける」ことをめざし、プロセス・ライティングの考え方に基づいて、「表2『人文学のリテラシー』(2012年度版)第1部の目次」に示すような内容で展開します。

表2 『人文学のリテラシー』(2012年度版)第1部の目次

第1部 「リテラシー入門～文章書き方講座」編

第1回 「知る」

1, レポート・論文とはどのような文章か

2, レポート・論文の文体

第2回 「構想を練る」

テーマ・課題を考える

第3回 「組み立てる」

1, レポート・論文の構造を知る

2, アウトラインを作成する

第4回 「書く」

1, パラグラフ・ライティングで書く

2, 参考文献の示し方、引用の仕方

ライティング課題

しかし、2011年度まではクラス規模と指導体制に関わって二つの問題を抱えていました。まず前者については、180名程度の学生を対象に授業を行っていたため、書き方の講義は効率よくできても、毎回の練習問題の添削や個別のフィードバックが十分に行えないという難しさがありました。一方、後者については、大勢の学生を対象に「書き方講座」(第1～4回)を担当する者と、小集団の「クラス別ライティング」(第5～6回)で、「ライティング課題」(1200字程度のレポート2回分)を添削して講評する担当者が別々であったため、「講義→(実作)→添削→フィードバック」という流れが、一貫性を持ちにくかったということがあります。

このような問題点を解決するために、2012年度からはクラスサイズを小集団とし、約20名の担当者(専任及び文学部出身の非常勤講師)が前期のライティング授業を一貫して受け持つ体制を作りました。そして、どのクラスにおいても一定程度の学びを担保するために、①非常勤の先生方への事前説明会の開催、②毎回の授業テーマや学ぶべき事柄がテキストからも明確に伝わるよう、文学部のオリジナルテキスト『人文学のリテラシー』の改訂、を行います。

今後は、2012年度の取り組みを円滑に進めるとともに、実施後は、ピア活動の導入など教授法の開発、後期の「学域別ライティング」や「研究入門」とのつながりという観点からの振り返りを行う必要があると考えています。

表1 2011年度から2012年度の「リテラシー入門」の内容の変化

2011年度までの内容	2012年度以降の内容
1 [情報リテラシー] 情報システム利用	1 [スチューデントスキル] ノートの取り方
2 [情報リテラシー] 情報システム利用	2 [インフォメーションスキル] 図書館
3 [日本語リテラシー] 文章書き方講座①	3 [インフォメーションスキル] 情報システム利用
4 [日本語リテラシー] 文章書き方講座②	4 [インフォメーションスキル] 情報システム利用
5 [日本語リテラシー] 文章書き方講座③	5 [インフォメーションスキル] Wordの活用
6 [日本語リテラシー] 文章書き方講座④	6 [インフォメーションスキル] Wordの活用
7 [情報リテラシー] Wordの活用	7 [ライティングスキル] レポートとは
8 [情報リテラシー] Wordの活用	8 [ライティングスキル] テーマを考える
9 [情報リテラシー] 図書館	9 [ライティングスキル] アウトラインを作成する
10 [日本語リテラシー] クラス別・課題の講評	10 [ライティングスキル] パラグラフライティングで書く
11 [情報リテラシー] Excelの活用	11 [スチューデントスキル] 健康管理
12 [情報リテラシー] Power Pointの活用	12 [キャリアスキル] キャリアセンターによる講義
13 [キャリアリテラシー] 上回生との懇談	13 [キャリアスキル] キャリア教育センターによる講義
14 [キャリアリテラシー] クラス別	14 [キャリアスキル] サービスラーニングセンターによる講義
15 [日本語リテラシー] クラス別・課題の講評	15 [ライティングスキル] 課題の講評
	16 [キャリアスキル] 専攻の選び方
	17 [インフォメーションスキル] Power Pointの活用
	18 [インフォメーションスキル] Power Pointの活用
	19 [インフォメーションスキル] Excelの活用
	20 [インフォメーションスキル] Excelの活用
	21 [インフォメーションスキル] インターネット活用とマナー
	22 [ライティングスキル] 学域別ライティング①
	23 [ライティングスキル] 学域別ライティング②
	24 [ライティングスキル] 学域別ライティング③
	25 [ライティングスキル] 学域別ライティング④
	26 [キャリアスキル] 国際平和ミュージアムの見学と討議
	27 [キャリアスキル] 上回生との懇談
	28 [キャリアスキル] 母校を知る
	29 [ライティングスキル] 学域別ライティング⑤
	30 [スチューデント/キャリアスキル] 学びの振り返り

シリーズ
質保証

映像学部における 重点行動計画策定ワークショップの取り組み

川村 健一郎 映像学部 副学部長

2007年4月に開設された映像学部は、映像に対する芸術的・経済的・工学的理解をふまえた創造性（プロデューサー・マインド）を基盤とする教学を展開してきました。2011年度からは、開設以来の教学理念を一層定着させるべく、新カリキュラムが実行に移されています。

映像学部のカリキュラムには四つの履修フィールド（映像文化、映像プロデュース、映像制作、映像テクノロジー）が設けられています。これらは、学生が進路を想定し、学修パスを意識しながら、卒業時に習得すべき能力を獲得することができるよう、授業選択のあり方をゆるやかにモデル化したものです。映像学部では、各フィールドの主要授業科目を担当する教員の中から、各フィールドのコーディネーターを選出し、フィールド内の授業担当者間の意見調整を図っています。

2011年度前期に行われた「学部・研究科重点行動計画策定ワークショップ」に、専任教員全員で参加しました。このワークショップでは、さしあたって学部教学に不可欠な「設備・機材維持および導入」をテーマに、こうした設備・機材を運用する映像制作および映像テクノロジーフィールドが中心になって、仮想的に、教育目標の実現に資する行動計画を策定していきました（ここでは「映像の制作に関する基礎から応用までの知識、技術、技能を身につける」という教育目標を取り上げています）。その際には、いわゆる座学系の映像文化フィールドが映像テクノロジーフィールドの議論に参加し、当該フィールドにおける「基礎」、「応用」の定義を検討して、それぞれに見合った教育内容を行動目標として設定しました。映像制作フィールドにおいても同様に、映像プロデュースフィールドの教員が参加して、映画・CG・ゲームの各表現領域における「基礎」、「応用」の意味を議論しています。

こうしたやり取りを通じて、各授業科目の意義とカリキュラム内での位置づけ、教学目標の実質化の方向が各教員に共有されていくことになります。時間的な制約もあって、このときは、「設備・機材維持および導入」というテーマ設定に対して、各フィールドの教学内容を検証する以上の行動計画を策定するには至りませんでした。一部の教員からは、このような情報交換の機会が大きな刺激になったという意見も聞かれました。映像制作フィールド、映像テクノロジーフィールドでは、上記のテーマに即した形で、このときのワークショップの進め方を検討モデルにしながら、議論を継続しています。

後期に開催されたワークショップにも、専任教員全員で参

加しました。このときは、前回のようにテーマ設定はせず、教育目標の一つを選択し、この目標に関連して、各フィールドの課題を改善する行動計画を策定していくこととしました。一例として、私が参加した映像プロデュースフィールドでの議論を紹介します。

映像プロデュースフィールドでは、卒業時に身につけておくべき能力としての実感に乏しい（「学びの実態調査」から）「映像文化に対する理解とともに、映像を活用して地域や社会との有機的な関係を創造していく視点と行動力」を教育目標として選択しました。中でも、「映像を活用して地域や社会との有機的な関係を創造していく」という言葉に着目し、学生のキャリア意識を開発するための科目群「キャリア形成科目」の見直しを、次期カリキュラム改革における議題とすることを行動計画の一つに掲げました。このことの背景には、スキルの段階的習得が必須である制作系の分野と異なり、高回生でビジネス分野の研究に従事することになる学生が、どれほど能動的にこのフィールドを選択しているかが判然としないという現状把握があります。こうした能動性を確保していくために、このフィールドにおける（低回生時からの）学修パスを一層明確化する必要があると考えました。

さらには、これと関連したもう一つの行動計画として、高回生時のゼミの充実があります。フィールドに関連するゼミの間で、情報共有、学生交流を図る機会として「インターゼミナール」を行うとともに、研究成果の発表の場として、映像学部映像学会が継続的に開催している「Eizo Junction」を積極的に活用していくことが提起されました。また、これらのゼミでは、各自で社会連携や参与観察の取り組みを進めているため、こうした成果を3回生期末に、「映像を用いた地域活性化に関する行動プラン集」にまとめ、対外的に発信していくことも検討されました。「地域や社会との有機的な関係を創造していく」ことを学生に実感させるアイデアの一つになるのではないかと思います。

ワークショップによる最大の成果は、各フィールドの理念および活動を言語化することを通して、教員間に教学理念やカリキュラム構造に対する共通理解を醸成することができたことでしょう。こうした手法が、さまざまな教学課題の解決を図る上で、教員に強い動機づけを与えるものであることも重要であると考えています。



2011年4月の開室以来、衣笠キャンパス図書館内にある「ぴあ」の累計利用者数は約5万人にのぼり（2012年1月時点・定点観測による測定）、「仲間とともに学ぶ楽しさ、成長する喜びを感じる場であること」というコンセプトのもと、主体的で創造的な学びのスタイルの場として、多くの学生に活用される新しい形の学習空間となっています。開室当初は1回生の利用が多かったのですが、日が経つにつれ、上回生の利用も増えていきました。また、ぴあでは総数90台のノートPCを貸し出ししており、学生たちが頻繁に活用しています。平日は約350人、休日は約90人の利用者がおり、特に試験・レポートの期間が近づくと、休日でも、全てのノートPCが貸し出される時間帯が多くあります。

ぴあでは、個人学習よりもグループでの学習が多く行われており、時期により学部・回生などの利用する学生の実態は変化します。例えば、ゼミ生同士で互いの卒業論文について、ホワイトボードを使用したブレイン・ストーミングでアイデアを出し合ったり、グループでプレゼンテーションを行うために、大型ディスプレイを使用しながら資料を作成したり、学生同士で得意分野を教えあったりと、様々なピアラーニングが行われています。とはいえ、個人での利用も少なくなく、ぴあらの開放的な空間や、賑やかな空間での学習が好きな人には合っているのかもしれません。

ぴあらはグループディスカッションができる貴重な環境であり、図書館内という学習空間の中にあることが、ぴあらが学習のため

の場所であることを認識させています。隣接する閲覧室から資料を持ち寄り、議論を発展させている様子もよく見受けられ、同じようにピア学習に励む周囲の学生たちに刺激される場所であるようにも感じています。さらに、カウンターからでも気軽にサポートできるため、スタッフとして落ち着いた対応ができます。

課題としては、ぴあらの利用者が日に日に増加しているため、現在のスペースに限界を感じつつあるということです。他者との議論を通じて、学習を深めていくことを多くの学生が求めていることを実感しています。

このように、ぴあらは様々なスタイルで利用されており、スペースの拡大やBKC・APUやさらには他大学の学生とのWeb会議や電子黒板などのICTの活用、リラックスして議論ができるエリアの設置などが進めば、ラーニング・コモンズとしてのますますの発展が期待できると思います。

ぴあらについては「学生同士（ピア）による主体的で創造的な新しい『学び』のスタイル」（ITL NEWS 2011, No. 18）で詳しくご紹介しております。ぜひご覧ください。

「ぴあ」で新しい学習支援が始まります

2012年4月から、BKCの2つの図書館においても「ぴあ」がスタートします。「メディア・ライブラリー」では、日本語ライティング支援の窓口が、「メディア・センター」では、数学・物理等の授業外学習支援の窓口が設置される予定です。

FD Glossary

セメスター(semester) 制

セメスター制とは、1時間の講義と2時間の予習復習を併せた計3時間分の学習を、15週続けることによって1単位を付与するという仕組みである。大崎仁の『大学改革 1945～1999（有斐閣）』によると、この制度は戦後、民間情報教育局（CIE）の意向を受けて大学設置基準に盛り込まれたようだが、その後半世紀ばかり各大学で恣意的な運用がなされてきたのは周知のところである。しかし、2008年3月に公表された中教審答申「学士課程教育の構築に向けて」では、改めて「単位制度の実質化」が掲げられ、授業外学習時間の確保とともに厳格な大学設置基準の遵守が求められることとなった。

セメスター制の重要な主旨は、通年制で見られた前・後期と異なり、ひとつの授業をセメスター内で完結させることにある。予習復習を含めた集中的な学習を実現するためにGPA（Grade Point Average）制度や1年間あるいは1セメスターに履修登録できる単位の上限を設けるキャップ制などと併用されることが多い。

最近では東京大学が学生の国際的な移動を視野に入れ、欧米で一般的な秋入学の検討を始めたことが報じられた。今後は教育の質保証における欧米の大学との競争激化にともない、形式的な統一にとどまらず学習成果に関する本質的な議論につながっていくことが予想される。